

G.E.M.Anscombe から見る行為 programming

—Level of Abstract による行為の categories—

笹本もも (Momo Sasamoto) 12pt

東京都立大学 専門研究員

“Intention” (1957 年) は G.E.M. アンスコム的主著の一つであり、D. デイヴィッドソンの “Actions, Reasons, and Causes” (1963 年) と並んで行為の哲学において重要な位置を占める著作であるが、その難解な語り口も相まって、内容を整然と理解することは困難である。

本発表では、“Intention” を、昨今の発展著しい情報の哲学の文脈を踏まえて読解する。

一例を挙げると、“Intention” において注目されてきた知見は、「観察によらない知 (known without observation)」である。この概念は従来は心の哲学に属する概念であると解釈することが多かった。

だが、この概念は情報分野で語られる「maker's knowledge」を踏まえて考察することによって、技術的な概念として捉え直すことができるだろう。

このように、アンスコム の提唱する概念を、情報の哲学を参考にして精読していくことによって、“Intention” を行為プログラミング論として読み解いていくことはできないかを探究していく。